



キーパーソンに聞く

新たな観光ビジネスの創造

地域のいいところをどんどんプラスに

有限会社 ニセコアドベンチャーセンター

代表取締役 **ロス・フィンドレー** 氏(写真)

聞き手：本誌編集部、三菱総合研究所研修生 面條 航

北海道ニセコは、羊蹄山の麓、ニセコ町・倶知安町・蘭越町などをまたぐ地域である。最近では外国人観光客の増加で話題を呼んでいる。このように騒がれる前、時代はまさにバブル経済真っ盛り、ニセコは、日本の若者を魅了する一大スキーリゾート地としてその名を馳せた。当時、まだ外国人がほとんどいないこの地域を、一人のオーストラリア人青年が訪れた。現在、ニセコアドベンチャーセンター(NAC)の代表取締役を務めるロス・フィンドレー氏である。ロス氏は、1995年にNACを設立し、新たな観光サービスとして激流の川を下るアウトドアスポーツ、ラフティングの事業化に成功し、ニセコを通年型の観光地に変貌させた。ロス氏に、ニセコで観光ビジネスを立ち上げるに至った経緯や、スポーツ、まちづくりに対する思いについて、お話を伺った。

●オーストラリアでスポーツサイエンスを学び、 スポーツの仕事をするために日本へ

本誌 子どもの頃についてお聞かせください。

ロス・フィンドレー（以下、ロス） オーストラリア人の男として普通の男。スポーツが大好きで、何でも体を動かすのが好きだった。高校の時は、陸上、サッカー、水泳、空手を同時に、そこそこのレベルでやっていた。最初にやったのはサッカー。6歳の時に。

大学を選ぶ時に、一生スポーツに関わっていければいいなと思い、当時オーストラリアで唯一のスポーツサイエンスのコースを選んだ。

1980年のモスクワオリンピックで、オーストラリアの成績が振るわなかった。それで世界と競争できるよう、スポーツエリートを集めて科学的、医学的にサポートする国立機関が設立された。その機関のキャンベラ担当者はスポーツ大臣でもあったので、自分の権限でキャンベラ大学にスポーツサイエンスのコースをつくった。アスリートは現役終了後、コーチとなるか、スポーツビジネスの経営に携わるか、メディアに入ることが多い。そのためにつくられたコースで、僕はできて3年目に入学した。スポーツコー

ピングとスポーツ経営を勉強した。マーケティングから人材活用まで、経営の基本についてまとまった考え方を学んだ。

本誌 その後、日本に来るまでの間、どのように過ごされていたのですか？

ロス 大学卒業後、シドニーにあるペニンシュラ・スポーツ・メディスン・センターで働いた。スポーツで怪我をした人達が来るリハビリジムのようなところ。僕はテストング(検査)とプログラミング(リハビリや治療のプログラムの作成)をしていた。世界レベルの選手も通っていて、そういった人達のリハビリのサポートをするのは楽しかった。最初の仕事としてよい経験だったし、当時オーストラリアは不景気で、スポーツの仕事があまりない中で、就職できてよかった。

ここで1年間働いた後、スイスに行って1シーズン、オーストラリア人スキー客を案内した。次にオーストラリアに戻って2年間、ハンディキャップスポーツ関係のコーディネーターとして仕事をした。その後、スポーツインストラクターをするために、1989年11月に日本に来た。

本誌 どうして日本に来られたのですか？

PROFILE

ロス・フィンドレー

1964年 オーストラリア・メルボルン生まれ
1985年 オーストラリア・キャンベラ大学スポーツスタディ
卒業
1989年 スキーインストラクターとして北海道札幌市に来日
1990年 ニセコに移住
1995年 ニセコアドベンチャーセンター (NAC) 設立

創業・ベンチャー国民フォーラム起業家部門「地域振興賞」受賞
観光カリスマ百選認定
その他、北海道アウトドア資格認定等委員会委員及び総括審査
会審査員、北海道の観光を考える百人委員会委員、北海道観光
審議会委員、北海道教育委員会講師バンク登録講師、北海道ハ
イテクノロジー専門学校非常勤講師、札幌国際大学非常勤講師、
北海道観光ベンチャービジネスタスクフォース委員、国土交通
省北海道開発局・北海道夢未来懇談会委員、経済産業省・集客
交流サービス研究会委員、創業・ベンチャー国民フォーラム幹
事などを務める。



ロス 当時(1980年代後半)、日本はお金持ちで、多くの旅行者がオーストラリアに来ていた。オーストラリアでスポーツの仕事を探す方法もあったけれど、何年先のことになるかわからないし、自分の履歴書に「スポーツ」の文字が入るからよいと思った。

日本に行くことと決めた時、日本語会話のレッスンを受け、その先生に手伝ってもらって日本のスキーインストラクター募集に応募したところ、3つくらい返事が来た。北海道(札幌)を選んだのは、三浦雄一郎さんのスキースクールだったから。そこでは2シーズン、インストラクターの仕事をした。シーズン以外はオーストラリアに帰っていたが、ウェイターのような仕事しかなかった。

その間にニセコに来ることがあり、雪がよかったから、次のシーズンからニセコでインストラクターをすることにした。当時ニセコには、英会話の先生ぐらいしか外国人はいなかった。僕は20代中頃で、スキーを楽しむことしか考えていなかった。それからずっとニセコにいる。

●僕はアイデア・マン

本誌 どういったきっかけで、ラフティングを事業として始められたのですか？

ロス ニセコに来て3年間、カヤックをやっていた。それで、川が楽しいと思い、川で何かできればいいなと考えていた。それと、まちはスキー人口が減って、ペンションが苦勞していた。「地域としていろいろやらないと誰も来ない」

と思った。それから、僕には、「リゾート地には1週間滞在する」という意識がある。でも、ニセコにはリゾートとしてすることが何もなく、何かしようと思った。

テニスやゴルフは違う。カヤックは、一人のスタッフで数人しか対応できないし、すぐにひっくり返って危険性も高い。それにすでに道内にやっている業者があった。それで考えていたところ、ラフティングを思いついた。

本誌 ロスさんは、アイデア・マンですね。

ロス (紙の表裏を指して)これくらいアイデアがある(笑)。自然にどんどん出てくる。ビジネスに限らず、子どもの頃からいつもアイデアが出ていた。

今、世界的にも国内的にもサイクリングブームで、北海道でもプロレースが行われている。でも市民レベルではなかなかないので、ぜひやりたいと企画している。

スキーに関しても一つアイデアがあって、CATスキー場をやりたい。圧雪車を使って人を山の中に運んで、ガイドを付けて新雪の中を滑ってもらう。一つの山まるごとでやるのは、日本で初めて。

ビジネスも、大学で学んだことに自分のアイデアと経験をたして、やっている。

●地域のいいところをどんどんプラスに

本誌 まちづくりについては、どのようにお考えですか？

ロス 日本で感じるのは、問題が起こらないと

ニセコアドベンチャーセンター(NAC)の活動



(左) ラフティング・ツアー、(右) スキー、(上中央) 羊蹄山

写真提供：NACニセコアドベンチャーセンター (<http://www.nac-web.com/>)

動かないということ。まちづくりや観光施策についても、いつも問題点からアプローチしている。それより自分の強い点から入って、それをもっとプラスに持っていけばいい。問題があるから動くのではなくて、自分のアイデアで動くのなら、地域のいいところや地域の特徴、特別さが出てくる。

本誌 ロスさんから見たニセコの“いいところ”は何でしょうか？

ロス 雪。ニセコの雪は、オーストラリアの雪とは比べものにならないぐらいいい。

次は、人かな。人というかライフスタイル。家族でも若い人でも、アウトドアなライフスタイル。ジョギング、カヤック、マウンテンバイク、ロードバイク、サーフィン、釣り、何でも。まちのみんながそれを楽しくやっている。移住者と話すと、ニセコのライフスタイルのために移住したとか、子どもをこんなところで育てたいから移住したとか言う。

本誌 ニセコの“いいところ”を、どんどんプラスにしていくのですね。

ロス 次は、もっと楽しいまちづくりをしなくてはならない。今、人が集まる場所がない。商店街にはカフェとか小さいレストランが必要。あとは、土地を持って管理しているのは北海道

や国だから、そのレベルまで、ニセコのライフスタイルを理解していないといけない。

●スポーツもビジネスも楽しむもの

本誌 オーストラリアではジュニアのスポーツクラブが盛んなのでしょうか？

ロス オーストラリアと日本では、スポーツのシステムが違う。オーストラリアはクラブスポーツ、日本は学校スポーツ。オーストラリアでは、学校は教科としての体育以外は何もしない。子どもは3時に学校から帰った後、好きなスポーツクラブに参加する。

僕は、日本における学校スポーツのシステムは、スポーツエリートの子供達にとってはいいかもしれないが、それ以外の子にとってはスポーツを楽しむ機会を奪っているような気がする。多くの人がいろんなスポーツを楽しめるシステムの方がいい。

本誌 それは、勝負するアスリート、それとも、趣味としてスポーツをする人のどちらについておっしゃっていますか？

ロス 両方。僕は個人的に練習が好きで、努力する過程も好き。でも、他の人はそうじゃない。無理に練習させて、そのスポーツが嫌いになるよりも、多くの人がたくさんのスポーツを自分

のレベルに合わせて楽しめるようにした方がいいと思う。

ニセコアドベンチャーセンター(NAC)では、みんなが楽しんでアドベンチャースポーツをできるようにしている。大会も、誰でも参加できるようにしている。

本誌 ロスさんはひたすら楽しいことを追い求め、スポーツというツールを通して展開していらっしゃるように思います。楽しいこととスポーツと、ビジネスとは違うように思いますが…。

ロス 一緒(笑)。楽しく仕事しようと思っている。スタッフにも楽しく働いて欲しい。客も楽しみに来ている。だからガイドする人も口うるさく言うより、みんなと一緒に挑戦して、楽しく川を下ろう、というスタンスでやっている。

本誌 事業を軌道に乗せるまでには、いろいろご苦労があったと思いますが。

ロス (無言で首を横に振りながら微笑) 苦労はあったかもしれないけど、僕は前向きな人間で、前の日のことは勉強として、楽しく前に行きたいから、長いこと苦労するようにしない。

ビジネスに限らずスポーツの世界でも同じことがいえる。スポーツでは、コーチは選手に苦労させたいのかと感じてしまう。大きい声でコーチしているのを見ると、何でそんなに怒るのだらうと思ってしまう。スポーツをすることでいい思い出を作った方がいい。

●再び、スポーツサイエンスへ

本誌 今後の抱負や課題をお聞かせください。

ロス 今はアドベンチャースポーツをやっているが、一番やりたかったのは「スポーツ」。基本のスポーツ、一般的なスポーツに戻りたい。

これからはスポーツサイエンスのビジネスを立ち上げたい。エリートレベルから市民レベルまで、スポーツトレーニングをサポートするビジネスをやりたいと思っている。どれくらい時間がかかるかわからない。この春からできるかどうか。今、リサーチをしているところ。

NACについては、通年雇用が今後の課題。スタッフは、夏は70人を越えるが、冬は30人くらい。NACはアドベンチャースポーツがメインだから、冬は弱い。自分達の特徴がアドベンチャースポーツだから、いろんなことをやるよりも、アドベンチャースポーツを奥深くやった方が、会社に付加価値が出てくる。いい味、NACとしてのブランドが確かになる。僕は本物だけに集中してやりたい。自分達の商品を安売りすると、値段だけじゃなくて、スタッフの気持ちも下がる。

本誌 最後に、最近ニセコに外国人観光客が増えていることについては、どのようにお考えですか？

ロス 何も考えていない。お客さんであれば誰でもウェルカム(歓迎)で、NACを使ってくれればありがたい。楽しくみんなと一緒にやりましょう、お互いにいい方向に向かって行きましょう、という感じかな。国際リゾートとしての日本の味を残さないと、お客さんに対して「日本」という部分の魅力がなくなるから、それは町で頑張ってくれればと思う。

インタビューを終えて

(面談 航 三菱総合研究所研修生、派遣元：滋賀県)

観光による地域振興・経済活性化の試みが全国各地で行われている中、倶知安町ひらふ地区は、オーストラリア人向け別荘等建設ラッシュで地価上昇率全国一位になるなど、国際的な観光地として変貌しつつあります。

ロスさんは、倶知安の自然の魅力に惹かれて移住され、地域の魅力を活かした事業を展開されていて、端々から倶知安での生活を謳歌されている様子がひしひしと伝わりました。お世話になったペンションのオーナーからも、倶知安の自然に魅せられて移住したという話を聞かせていただきました。

今後ますます地域間競争が激しくなるであろう観光振興は、「いかに地域住民が地域の魅力を感じているか」が肝になる。このことを、今回のインタビューを通じて強く印象付けられました。すでにいくつもの自治体が「地域学」や「地域の魅力再発見」などの切り口で、さまざまな取組みを始めていますが、まずは私達自治体職員が地域の魅力をしっかりと認識し、地域を楽しむことこそが本当の第一歩なのだと思います。

